

六 花 5



俳句雑誌りつか
2017 (平成29年)
cover design Yuna Mizuno

山田六甲

遊びに未熟

かん
閑

水槽のまだ覚めやらず水温み
穴出でし蜥蜴のいまだ枯れ色に
根こそぎは思ひとどまり野のすみれ
枯草に紛れて蜥蜴穴を出づ
御幸の杳を聴さしか落椿
山門の中明るかり三月尽
新緑に洗練さるる魚ともに
春水に桶のやうなる舟浮び
伊吹山へと舟を向けおき鮎を挿す
花散らす雨に利き酒してをりぬ

孝徳天皇行幸石峯寺

過ごし方知らぬ未熟を花の昼
琴びきの塩むすびあり桜かな
雲置いて雨去りゆける桜山
あふる風迎うつ風花吹雪
墨減つて矢尻のごとし花の昼
陰陽や不俱戴天の山桜
陰陽の空へ根を張る桜かな
橋立の旅情にいさざ啜るかな
飛石の歩幅たのしも花の散る
帯締の少し斜めや花衣

雪嶺抄

春の月

笹村 政子

凍蝶を喪心にみてをりにけり
凍空をはね返しくる木霊かな
待春や近江の人の雪だより
祖父の名の残る献灯節分会
赤鬼の闇に還りて追儼果つ
拭へどもくもる手鏡寒戻る
乗り合すバイク少年春の航
かざしみる日のまだ淡き種袋
ややありて主の声す種物屋
転院の夫と見あぐる春の月

雪卿集

冬籠

佐津のぼる

寒や内陣うすぐらき仏の灯
ひるすぎにしばしまどろむ冬籠
月光に濡れてひかれる軒氷柱
一枚を脱ぐ探梅の日差しかな
だしぬけに鯉跳ねて春遠からじ

福豆

永田万年青

上げし掌に当たるや福の豆掴む
飛び上がり福豆受くる子供かな
長老の同じところらに豆を撒く
子供部屋四隅に豆を撒きにけり
春の鳶羽を荒げて飛び発てり

雪卿集

溪水

升田ヤス子

溪水の大寒の音発したる
甌穴のまざまざと溪涸れにけり
軒下に梢つみ書院閉ざさるる
この世見る眼差しやさし追儼鬼
下宿屋といまも言はれて柵挿す

お稲荷さん

志方章子

生みたての湯気あがりけり寒卵
鏡餅庭のお稲荷さんにも一つ
三代の総出に餅を搗きにけり
雪吊の縄に新雪乗りてをり
初めての嫁のつくれるごまめかな

雪卿集

春の鹿

藤生不二男

春の鹿澄める眼のたぢろがず
春潮の立ちては波のくづれけり
ひとときを蹲ひゐたる葦かな
白梅の冷えてきたりし白さかな
片膝をつけば土筆のそこかしこ

グローブ

出口

誠

グローブの手入れがすすむ春の宵
春の朝バイクの陰に猫の居る
少年が小犬を連れて春の宵
春ごたつ入つたきりで出られない
寝転びて両目閉ざして春ごたつ

雪樹集

豆撒き
廣畑育子

豆撒きの小窓を開けてをりにけり
十分の一で良いわと年の豆
節分や夫の買ひたる焼鯛
藪椿色褪せてゐる仁王像
川音や梅の香れる奥の院

御神籤
赤松有馬守破天龍正義

御神籤を咲かせてをりぬ松の明け
霰から雲に変はり法の山
万両や温泉宿の床飾り
内股に鬼の暴れる追儼式
鳥取にスナック駒子や雪深し

雪樹集

村時雨

谷口一猷

節分や三日月に星はんなりと
ひりひりと火照り残るや鬼やらひ
堂塔の威風堂々山眠る
村時雨仁王の貌の緩まざる
春めいてとんと晩酌減りにけり

寝酒

溝渕弘志

九十五の父と焼鳥食べにけり
沢庵の痛快な音父元氣
悩みあり少し多めの寝酒かな
水仙や風にゆらゆら遊んでる
玄関に一本の梅妻飾る

雪樹集

寒波

住田千代子

近道の畦に踏みをり仏の座
一輪の梅の濡れゐて紅深む
冬川の岩間の音のまどかなる、
震るるや入り乱れたる靴の跡
寒波来てぐるぐる巻きの蛇口かな

白蒲公英

田尻 勝子

石段の木下闇へと消えゆける
夜に出でて白き蒲公英盗りにゆく
甲虫の羽根を納めず縋る藤
冬將軍孫はやつぱりつむじ風
ことりさん
本当に亀鳴くんやと言うた人

雪樹集

追
儼

延川五十昭

赤鬼の松明かざす追儼の夜
節分会どこか憎めぬ鬼の面
法螺の音に鳩飛び立てる節分会
うつむきし鬼面の翳る追儼かな
鬼面を古櫃に納め追儼やむ



蛍雪譚

六甲選

二十九年五月号鑑賞と随想

御神籤を咲かせてをりぬ松の明け

赤松有馬守破天龍正義

初詣でお神籤を引いたとき、不吉な場合は神域の枝にくくりつけておくと凶が吉に転じるらしい。また、二人の神籤を一所に括つておくと縁結びになるというものだから、不吉でなくても皆がくくりつけるから、花が咲いているように見えるみくじと譬えたのが面白い。初詣でくくりつけた物を、松明けの丑の刻に行つて括つた物をほどくと「よりを戻す」といつて別れた人と再び縁が結ばれるという。本当か嘘かしらないが。

節分や三日月に星はんなりと

谷口 一献

「はんなり」という言葉のニュアンスを関西人以外の人には伝わりにくい。百科事典によれば「京言葉を中心に近畿地方で用いられる日本語の副詞である。落ち着いた華やかさがあり、上品に明るく陽気なさまを表す。語源はへ花なりへまたはへ花ありとされる。」とある。伊予の山猿の主宰は、この表現になかなかなじめなかった。今になつてなんとなく肌になじむようになったが、分かつてみればなかなかいい言葉である。節分のころ夕空には三日月が輝いていて寄り添うように星がある。その様子がはんなりなのであろう。句は月と星の関係を詠んでいるようでもあり、それを見上げている男女の空気がはんなりとしているのかも知れぬ。一献なら後者も考えられるであらう。

六^り花^か集^し



皇月
到着順

平居 濤子

春立つやフルート二人瞳で合図
大桶の注連ややゆるむ二月尽
娘の雛も今年限りと壇を組む
古墳への橋朽ちかかる浅き春
幾万の霊と古墳の青き踏む

江見 巖

床の間に杖を寝かせる遍路宿
つちのこの発見場所とや犬ふぐり
卒業や人体模型涙する
踏青や反抗期まだ途中なる
葱坊主涙をふきし餓鬼大将

大内 幸子

風花や傘を持たずに小買物
硯の海拭ひて日脚やや伸びぬ
床の花葉蘭に替へて春立ちぬ
句友を訪ふ背伸びして出る炬燵猫
申告を済ませて戻る梅時雨